

元捕虜遺族ケネディ一家の来訪

11 月 16 日、平和記念公園

豪捕虜遺族来園

近藤 芳一

2016 年 11 月、直江津捕虜収容所において最も悲惨な死を遂げた捕虜のひとり、ボブ・ファーレイの遺族（ボブの異母妹ウエンディ・ケネディ、夫ポール、娘のエマとピップ）が平和記念公園を訪問した。

私たちが捕虜の死を表す場合、「当地で亡くなった」と言う。一方、今回来園された遺族ははっきりと、「直江津で殺された (killed)」と語った。同じ死であっても、立場によってこれほどの差が出る。私たちはこのことを心に留め、今後の日豪交流を続けていかなければいけない。

ケネディ一家の平和公園訪問は、以下の POW 研究会、高田ミネさんのレポートに詳細を委ねる。



小学生と対話



会員と懇談



ケネディ一家 直江津訪問記 -2016年11月16日-

POW研究会 高田 ミネ

11月16日(水)品川駅構内で一家と合流し、東京駅に案内。北陸新幹線のホームに急ぐ。新幹線の改札口では切符の漢字が読めないせいか、往復の切符を間違えて投入、ストップをくらい、私も慌てる。一家はBullet train(新幹線)が初体験なので、興味津々の様子。予定通り8:44金沢新幹線“はくたか”555号発車。

ここでケネディ一家と元捕虜ロバート・ファーレイ(Robert Farley、1920~1944)の関係、そして一家が来日するまでのいきさつを説明する。

妻のウエンディは72歳。彼女の父親の2度目の結婚で彼女が生まれる。最初の結婚で父にはチャムとロバート(愛称ボビー以下Robert Farleyを一家の呼び名ボビーで表す)とデルと3人の子供がおり、ウエンディはこの3人との異母兄弟にあたる。特に今回来日のきっかけとなった直江津収容所で死亡したボビーの存在を今から15年ぐらい前、デル義姉との交流が始まってから知ったという。

ボビーは1941年、21歳の時入隊。長兄のチャムは弟のボビーが志願して入隊したことを知り、自分も弟を守るためにすぐに志願し、同じ部隊に配属されたという。やがて1942年2月、シンガポール陥落。二人はチャンギ収容所に収容されるも、ボビーは“C”部隊550名と一緒にシンガポール⇒鎌倉丸⇒門司⇒直江津収容所へ移送。健康状態の悪かったチャムはそのままチャンギに残り、生還して、オーストラリアへ戻る。ボビーは直江津収容所で1944年1月27日に亡くなっている。

ウエンディはボビーの妹デル義姉の世話を15年ぐらい前から始めたが、彼女が高齢になり老人ホームに入ることになった。その引っ越し荷物の中からボビーの死の話を知ることになる。デルは収集癖があり、亡くなった兄、ボビーに関わるいろいろな記録を集めていた。戦時中、ボビーが母に宛てて送った軍事郵便物や直江津の戦犯裁判の新聞記事など。ウエンディはこの時、その死がただの病死ではなく、虐待死であることにショックを受け、生きて帰れば会えたであろう24歳上の異母兄弟を知る。一方、夫のポールはボビーがチャンギで収容されていたが、雪の中で死んだという話が伝わっていたことから、あの常夏のシンガポールのチャンギで雪とは何だろうと思っていたという。それが、日本の直江津収容所で話が繋がった。それから歴史に興味のあるポールはいろいろな資料を基にボビーの死の原因を詳し

く調べ始める。GHQ の裁判資料や直江津収容所の体験者の手記や本などを夢中で読んだという。

2016年4月にデルは亡くなり(92歳)、一家は彼女に遠慮していた日本への訪問を実行に移すことにした。デルの前で日本の話はタブーだったという。同様に繊細なところのある妻、ウエンディにとってボビーの GHQ 裁判記録で虐待の詳細を書いた箇所はタブーであり、ポールは娘たちには見せても、妻には見せなかったという。

やがて北陸新幹線は上越妙高に 10:45 到着。ここで在来線に乗り換えて直江津 11:13 着。思ったより寒い。降りると何と石塚洋子さんと上越日豪協会の近藤芳一会長がオーストラリア国旗を広げてホームで待っていてくれた。そこを地元の BSN 新潟放送(TBS 系列)が VTR をもって待ち構えていた。一家は笑顔でカメラに収まり、駅前のホテルで昼食とする。

昼食時にポールの見せてくれた資料は貴重だった。俘虜郵便で収容所から母親に届いたポストカードが3通とチャンギから出したクリスマスに寄せた絵入りの手紙など。そして戦後、横浜裁判の様子を伝える新聞の切り抜きなど。最後のポストカードは 1943 年 12 月 13 日付け、でシドニーの母に宛てたものがある。(下右) 彼が死んだのは明けて 44 年 1 月 27 日であるから死ぬ約 1 か月半前の手紙である。宛書には東京第 4 分所(直江津収容所)からとあり、軍事郵便の検閲済みの判が押してある。(下左)



文面は『・ ・ I am in the best of health and sprits. So there is no need to worry. Hoping you have a Merry Xmas, I am hoping for a Red Cross issue for mine. ・ ・ 』とある。『健康状態は良好であり、心配はいらない。赤十字を通じて慰問品を送ってくれないか。』という文字が読み取れる。当時は郵便物の検閲があっただけに、この内容は本当なのだろうか、という疑問がおきる。文の最後の慰問品を希望する気持ちは本当だろう。しかし、彼の健康状態はどうだろう。

横浜裁判、BC 級戦犯の直江津収容所に関する裁判記録 - 1948 年 6 月 16 日付第 8 軍総司令部法務官室の出した 7 人の軍人に関する裁判記録、法務官検審書 - 石塚洋子さん所有の資料(邦訳付き) - を読んでみた。

直江津収容所では捕虜 60 人が死亡した。横浜裁判（BC 級裁判）では戦犯が 15 人、うち 8 人が絞首刑という厳しい判決がでている。処刑された 8 人のうち、軍人は 2 名、軍属は 6 人であった。

まず、ボビーの死亡当時の所長だった O 所長の罪状は「①赤十字食料及び補給品の故意と違法による着服流用、②1943 年 1 月 20 日より 1 月 23 日の間、連合軍捕虜指令当局の繰り返しの要求と抗議にも関わらず、食料・衣類及び適当なる医療の無視・拒否・否定により収容所長としての職務を怠り、捕虜の死に寄与・促進させたこと。③1943 年 1 月 20 日から 1945 年 1 月 23 日の間になされた悲劇と連合軍捕虜に対する攻撃を、部下及び監督の者が犯すことを、抑制をすべき収容所の所長としての職務の不履行や無関心を告発する。」とあり、その細目として 1943 年 9 月 1 日より 1944 年 1 月 27 日の間、S 軍曹、A 軍曹、K 兵卒によってオーストラリア捕虜ロバート・G・ファーレイ兵卒を繰り返し殴打させ、冬期間毛布なしに寝るべき時間に長時間雪の中に立たせ、また病気中も労働をさせた等の違法なる虐待・拷問及び残虐行為によって、彼の死に寄与し促進させたことで告発されている。

そして同じような虐待の内容は豪捕虜通信兵、D.フレイザー、など虐待がもとで死亡した兵士 7 人と辛くも生還した 3 人の兵士、他数多くの殴打された兵士になされたと記されている。ここに名前が出ているロバート・G・ファーレイ兵卒とはボビーのことである。そして名前が出た A 軍曹、S 軍曹、K 兵卒がそれぞれの裁判記録の中でファーレイ兵卒を虐待し、死に至らしめたという告発をされている。

この検審書によればファーレイへの虐待は 43 年 9 月 1 日より、44 年 1 月 27 日の間、実行されている。この間、ファーレイは本心から『私の健康は良好だ』と書けるだろうか。自分の健在を心配している家族にこのように書かなければ郵便が許可されなかった状況を思うとやりきれないものがある。また、彼が継続的に虐待されていた証言がある。検審書の「証拠の概要」の中で 1943 年～1944 年の秋または冬、ファーレイ捕虜は盗みによって営倉に入れられ、返されてはすぐ食料を盗んで捕らえられた。

註；この繰り返しの盗みは「Japanese War Crime」著者 Alan B. Lyon の本の中で同じく重営倉入りし、生還したダウニーが証言している。それによれば、ファーレイの話として非常に空腹だったので日本人に捕まると、ついには死に至るだろうと知りながら、盗む誘惑に抵抗できなかったと語ったとある。重営倉とは毛布を取り上げられ、食事の量を減らされ、靴、靴下、オーバーを取りあげられることを意味するとある。営倉から仕事へ行き、帰ると営倉へ、これが 4 日ほど続く。ダウニーの証言では、ある時は雪の中、裸で長時間たたされていた。殴られながら殺してくれと叫ぶのが聞こえた。顔の形がわからなくなるまで殴られたと。そして営倉で肺炎になり、病院に運ばれた後、クルップ肺炎で死亡したとある。GHQ の死亡者リストの収容所別捕虜死亡欄では死因が咽頭肺炎となっている。

虐待によりなどとは書いていない。これがファーレイ＝ボビーに関する裁判記録である。

註； Alan B・Lyon はオーストラリア軍人。戦時中は蘭領ボルネオに配属。戦後は連合軍司令部法務局に勤務し、裁判を身近に見たものとして 2000 年にこの著書を発刊。

判決が下る。彼らは罪状を否認したが A 軍曹、S 軍曹は絞首刑、K 兵卒は終身刑、O 所長も終身刑である。直接手を加えた 2 名は絞首刑、監督不行き届きだったとして所長は終身刑であった。また同時に訴追された民間人ガード（軍属）7 名のうち 6 名が絞首刑であった。この数は他の収容所に比して多い。検審書では 43 年の 1 月から 45 年 8 月までの間、軍属は 18 人の捕虜の死に関して彼ら軍属による違法な虐待、拷問や殴打が頻繁に行われたと記している。そして召喚された検事側証人が次々と虐待の実態を証言している。

また、Alan B. Lyon は本書のエピローグの中で民間人ガード（軍属）の刑がきびしかった理由として彼らが工場の行き返りや労働部隊の監督として時間的に接する機会が多かったことと、収容所職員（軍人）にそそのかされて多くの行動をしたと記している。

なお、検審書の「証拠の概要」に興味深い記録がある。あの“渡辺睦裕軍曹”が直江津収容所に 45 年 1 月 1 日より 7 月 30 日まで勤務している。『渡辺は I 所長と一緒に（O 所長は 45 年 1 月 23 日に解任）赤十字の箱のいくつかを収容所の職員に与えると捕虜に言わせるように K 兵卒を扇動したと。また、渡辺は箱の分配の度にそのいくつかを職員に与えるよう捕虜に要求した。』とある。

ほどなくして渡辺睦裕軍曹は直江津を去る。その後彼は GHQ に戦犯として訴追されるが追及を巧みにかわして潜伏し、戦後は保険業を成功させている。2003 年に死去。後年にはオーストラリアのゴールドコーストに保養に行くなど豪捕虜を始め、彼の虐待にあった捕虜にとっては許し難い行動をとっている。（特に大森収容所や直江津収容所において米捕虜ルイス・ザンペリーニが目立って虐待された様子が映画“アンブロークン”で描かれている。）

ポールはこうした直江津収容所についての GHQ 資料や収容された捕虜の証言をもとにして書かれた本や文章を読み込んで来日している。話をウエンディ一家の直江津訪問に戻す。

昼食後に覚真寺（かくしんじ）へいく。ここの先々代の藤戸円理住職は戦時中、直江津収容所で死亡した捕虜の遺骨を預かっていた。引き受け手のない遺骨を本堂に安置し、遺骨を持ってきた捕虜たちに食べ物を与えていたという。住職は「死んだ者に敵も味方もありゃせん」という信条をもっていた。捕虜たちが立ち寄った際はお嫁さんに食べものを与えるように指示していたなど、直接お嫁さんから聞いたことがある前上越日豪協会の会長、石塚正一（POW 会員）の話もある。

境内の庭に「死者には敵も味方もありゃせん」との言葉を記した碑がある。この碑は1995年、「直江津捕虜収容所の平和友好記念像を建てる会」が建てた。近藤会長が“Among the dead, there are neither enemies nor allies.”という碑文の意味を説明すると一家は堪らなくなったのか、涙ぐんだ。「捕虜のためにこのような碑を建ててくれてありがとう」と近藤会長にハグしている。ポビーの遺骨がこの寺に一時的に安置され、それから保土ヶ谷の連邦墓地へ埋葬された経緯がわかったようだ。ここで早くも地元テレビより取材を受ける。6時の県内のニュースに間に合わせるための取材だ。涙を払いながら、各自が口々に感想を述べている。

(確かにBSN新潟放送で6時半ごろのニュースに放映され、一家は帰りの電車に乗る前に車の中のTVで視ることが出来、感激していた。)

本堂の中へ上がらせてもらい、本尊前の賽銭箱に小銭をなげいれ、お香を焚いてそれぞれ祈っていた。



後列左から近藤、石塚、ポール、ウエンディ、関
前列 高田、エマ、ピップ

それから、車で2つの工場へ移動した。一つは日本ステンレス（戦時中は帝国特殊製鋼）、現在の新日鐵住金直江津工場ともう一つはその近くにある信越化学直江津工場だ。海岸に建つ収容所から海沿いの道を歩いて工場へは30分余。近いとはいえ、寒風が海から吹き寄せる冬はさぞつらい移動だっただろう。

工場労働の他に、すぐ近くの港へ着く船の荷役、石炭などの積み下ろしが捕虜たちの主な労働だった。

工場は見学を申し込んでいないこともあり、門から中の様子をうかがうだけだ。ここでも女性ら3人は涙ぐんで中をみている。工場の守衛が不審そうに見ているので説明に行ったところ、理由がわかった様子だった。

それから、平和公園へ移動した。平和公園は収容所跡地に建てられた公園で捕虜の慰霊碑と絞首刑になった8人の戦犯の慰霊碑が同じ敷地内にある。そして資料館があり、見学者やケネディー一家のような捕虜の関係者の案内や説明を日豪協会の会員がボランティアでやっている。

今日は妙高市内の小学校高学年約30人が平和学習に来ていた。資料館で戦時中、ここに捕虜収容所があったことや当時の暮らしについて写真や道具で説明を受けている。彼らからケネディー一家はインタビューを受ける。事前に協会の方が一家について説明している。通訳は近藤会長が務める。

小学生の質問1：日本へ来て感じたことは？

ウエンディ：いろいろな出来事にとってもびっくりした。

小学生2：戦争についてどう思うか。

エマ：国はやりたくないことをさせていると思う。

小学生3：ファーレイは食べ物を盗んで暴行を受けたと聞いているがどう思うか。

ウエンディ：オーストラリアは仲間を重んじる国で mateship(メイトシップ)という言葉がある。友達が困っていたら助けなさいと教えられたので、友だちがお腹を空かせていたら、自然と盗みもやったと思う。

小学生4：戦争が起きたらどうしますか。

ピップ：世界中で紛争が絶えないが、起きないことを祈る。もし、起きたら早く終わるように祈る。

やがてポールが話し始めた。

ポール：みんなここで何が起きたか、はっきり知らなくてはいけない。ここにいた捕虜たちは爆弾や銃で死んだのではない。殺されたんだ。第一次世界大戦ではオーストラリアと日本は味方同士だった。第二次世界大戦では敵になった。今は友だちだ。みんなはじめを見たらやめろと言って注意してほしい。平和を続けてほしいと思う。この場所を知ったあなた方はここで起こったことをいろいろな人に伝えてほしい。

多くの質問があったが、4人でかわるがわる答えている。最後は全員で記念撮影。

3時も過ぎ頃、児童はバスで帰っていった。平和公園で捕虜の関係者と出会ったことは子どもたちの心に深く刻まれたに違いない。その後も地元マスコミの取材が続く。



日も落ちた4時ごろ、資料館に入り日豪協会の会員との交流が始まる。

最初に直江津収容所と資料館の設置をDVDで紹介し、これを一家にプレゼントした。

ポールが来日したいきさつを話し始める。義姉デルの引っ越しの手伝いに行ったときボビーの遺品や新聞記事を見てボビーの存在や捕虜になって日本で死んだことを知った。それから彼のことを調べるようになった。そして、ウエンディは日本人と聞いただけで、情緒が不安定になったと。また映画”アンブロークン”を観て収容所での捕虜に対する虐待がよくわかったと述べた。

そこでこの平和公園が設立されるまでのいきさつを当時、設立委員会を立ち上げた石塚洋子が英語で説明。絞首刑になった戦犯の慰霊碑が同じ敷地に建つことに豪側が反対し、その説得のために何回も渡豪したこと、平和公園を作るきっかけになった一つはカウラ事件で死亡した日本人捕虜の墓地を豪側が手厚く管理していることに感銘を受けたこと、直江津市内の人々に寄付を募り、反対する人を説得して歩いたことなどを語った。また、元捕虜の方がこの慰霊碑を訪れた際に、日本人の慰霊碑の方に献花するのは大変複雑な心境だと理解する。ヒルさんという元豪捕虜は3回目の訪問でやっと憎しみを超えて献花したことなど話した。

次に私が日豪協会の会員の皆さんに活動を通じて豪州の方々に何を伝え、何を期待するかと聞いた。それを契機に双方の発言が始まった。

会員：私は豪州の方々よりまず先に地元の人に直江津収容所の話伝え続けることが大事なのではないかと思う。それにはまず、家庭でも戦争の話を伝えたい。

エマ：日本人だけでやるのではなく、日豪のメッセージが必要、協力すればもっと良いものになるのでは。

ポール：私は発言の中でボビーはここで殺された (killed) と言っているがこのことについてどう思うか。

会員：あまりに強い言葉なので驚いた。今までそういわれたことはないので、少し戸惑う。

ピップ：その言葉が皆さんの気持ちを害したのであれば申し訳ない。ここに来て私たちはとても謙虚な (humble) 心境だ。

エマ：父も少し混乱していると思う。気に障ったら謝る。

ポール：kill という言葉はそもそも爆弾や銃で死ぬことを意味する言葉だ。なので、直江津で亡くなった捕虜について言うには適切ではないかもしれない。しかし、捕虜たちは自分の身を守るすべは何も持っていなかったが、民間人 (軍属) は持っていたし、力もあった。何をどう使うか、捕虜の扱いは力を持つ側が考えるべきだった。

会員：処刑された8名のうち、軍属は6人で軍人は2名。軍属はただ命令に従っただけなのに死刑になったのはかわいそう。

エマ：実は碑への献花の場面で、花束から何本か花を抜いて、日本側へとも思ったが姉に相談したところ、母の手前それはまずいのではと言われ、ひかえた。

ウエンディ：命令の通りに行動しただけだから許せというのはどうか。では、その命令を下した者はどうなのか。それも含めての裁判結果だろう。

会員：私は戦時中に女学生だったが、憲兵隊の怖しさを聞いている。この収容所で働く看護婦が具合の悪い捕虜は仕事を休ませたらどうかと言っただけで警察に連れて行かれ留置された。彼女は知り合いが警察の上の人で出られたがこの時は怖い時代で捕虜をかばう余地がなかったし、上の命令は絶対だった。

ポール：民間人（軍属）が捕虜を虐待した理由には、彼らの体面を守るため、また仲間が戦場で傷ついたり戦死したりしたとの理由で捕虜を憎んでいたのだろう。（処刑された8名に関して）彼らは力のある人が力をセーブするのが当然なのに、生まれ持った残忍な性格だったからだ処罰されたのだ。（They were cruel by nature.）

それから、今後の公園についても考えを話す。

ポール：POW 研究会や日豪協会の活動をボランティアで行っているのは素晴らしい。ただ、ファンドシステムや NPO のようなものを使って公園の設備を追加してもっと立派な施設にしたらどうだろう。

交流会が終わって、率直な一家の感想や意見を得て今までにない深い話をしたと近藤会長をはじめ会員の皆さんからの感想があった。草の根交流を目指す POW 研究会としてはうれしい言葉だった。

直江津に名残を惜しむ一家を追い立てるように帰路の電車に乗せ、品川のホテルに帰ってきたのが夜の9時半。豪へ帰ってからもこの経験を伝えることを期して別れた。

今回、ケネディー一家と出会い、捕虜の直接の遺族ではないが、その異母兄弟、次世代であるオーストラリア人の持つ考えや感想を知った。いろいろ触発されるものがあり、実りの多い交流だった。



【投稿】

小さなブーケに想いを込めて

—ウエンディ・ケネディー一家を迎えて—

横関 レイ子

11月11日に近藤会長からメールが届き、オーストラリアのケネディー一家が11月16日に直江津を訪問する旨を知った。POW 研究会の情報として、今回来訪するウエンディ・ケネ

ディさんは、直江津捕虜収容所で亡くなったロバート・ファーリーさんの異母妹であること、そして2人は兄弟ではあるが会うことはなかったと、書かれていた。

さらに11月14日に、再びロバートさんに関するPOW研究会からの更新情報が近藤会長のメールで送られてきて、そこには彼が亡くなった経緯が具体的に書かれていた。彼は収容所で仲間のために食料調達をしていたことを見咎められ、厳しい懲罰を受けたとのこと。そのため真っ裸で雪の吹き溜まりに6時間立たされていた、などと記されていた。そして、顔が2倍以上に腫れ上がるほどのひどい暴行を受け、それが元で亡くなってしまったのだという。

その目を通すのも恐ろしいほどの内容のメールを読んだ時、私は大変ショックを受け、涙が出そうになった。これまで幾度となく元捕虜だった人達の話の聞いたり、あるいは文章を読んできたはずなのに、今回の記事はなぜか切ないほど悲しいままに私の胸に突き刺さった。

遠く離れた異国の地で、そんな最期を迎えなければならなかったロバートさんの短い人生を想う時、どうしようもないほどのやるせなさを覚えずにはいられなかった。まだたった23歳の若者だったのだ！

どうか戦争の過ちを許して欲しい、と私は心の中で祈った。戦争がもたらす惨虐性は、直接的であろうと間接的であろうと、あるいは何十年という月日が経とうとも、心が痛むことには変わりがない。

この度ウエンディさんが、どんな気持ちで直江津を訪れるかはわからない。彼女達を迎えるに当たって、一体自分に何ができるだろうか、と私は考えた。

そんな時、実家に行くと、庭には色とりどりの小菊の花がたくさん咲いていた。

〈そうだ！花をもらっていやがる人はいない。この小菊でブーケを作って、ウエンディさんに贈ることにしよう。それが、私にできるささやかなおもてなしになるだろう〉

そこで16日の朝もう一度実家に行き、黄色やピンク、小豆色の菊の花や、紫色の実の付いた灌木の細い枝などをもらってきた。そして、家に戻ると私は、慣れない手付きで小さなブーケを作り上げた。

(ちなみにこの時用いた紫色と水色のフラワーシートは、昨年平和の集いの灯籠に使用したのと同じ材料である。私の手元に残されていた物だが、これも何かの縁かもしれないと思って使うことにした)

午後3時過ぎに、ケネディ一家が平和記念公園にやってきた。私は、ウエンディさんに"Welcome to Naoetsu"と言い、そして、"This is for you and your brother"と、付け加えた。ウエンディさんは、少し驚いた様子だったが、これは私の手作りだと伝えると御礼を言って受け取ってくれた。

折しもこの日は、妙高市立新井北小学校の児童達が、平和学習のために公園を訪れていた。ケネディ一家は、彼らとひととき交流の場を持ったが、ウエンディさんは、その間ずっとブーケを手放すことなく持ち続けていた。

児童達が帰った後、今度は展示館に於いて一家と日豪協会のメンバーの間で、しばし意見交換が行われた。しかし、やがて電車の時間になり、ケネディ一家が直江津を離れる時がやってきた。

天国のロバートさんが、直江津捕虜収容所のことをどう思っていたかを尋ねることはもはや永遠に叶わないが、彼の悲惨な最期に思いを馳せる時、少なくとも彼の無念だけはよくわかる気がするのである。それでもウエンディさんの娘さん達が帰りしなに両腕を広げてハグしてくれた時、せめてロバートさんがこの様子を見ていてくれますようにと、私は一人胸の内で思ったのだった。



元捕虜ロバートソン中佐遺族の来訪

10月13日、保土ヶ谷の英連邦戦没者墓地

元捕虜ロバートソン中佐の孫とともに

大嶽 里恵子

直江津で元オーストラリア捕虜のリーダー格であったアンドリュー・ロバートソン中佐の娘マージョリーさんの長男デイヴィッドさんと妻ブロンウインさん、長女のジュリーさんの3人が、10月半ばに1週間の予定で来日しました。今回の第1の目的は、保土ヶ谷の英連邦戦没者墓地にあるお祖父さんのお墓にお参りすること。初来日で観光もしたいし、直江津までは来れないというので、10月13日～15日に私も上京し、3日間行動をともにしました。

マージョリーさんとは1995年平和記念公園の除幕式でボランティア通訳としてお手伝いした時に知り合い、以来21年間良き友人としておつきあいさせていただいています。これまでシドニーのお宅も3回訪問しています。その折に子どもさんたちにも会っているので、彼らとは15年ぶりの再会です。13日に宿泊先の新宿のホテルを訪ねて、すぐに保土ヶ谷の墓地へ。私にとってはここも三度目になるので、今回はすんなり案内できました。

横浜の喧騒を離れ、緑に囲まれた心休まる明るい墓地です。英連邦のいろいろな地区別になっていて、オーストラリア地区は比較的こじんまりしています。ロバートソン中佐のお墓には1943年3月31日に37歳で亡くなったと書いてありました。ジュリーさんが手作りの赤いポピーの花を供えてしばし瞑想の時間を過ごしました。墓地の管理人さんが出雲崎出身の方で、近藤会長とは毎年大使館のパーティで顔を合わせていますとのことでした。



保土ヶ谷駅前のお寿司屋で昼食。お寿司は毎日食べてもいいという程お寿司好きの3人でした。その後横浜のみなとみらいに案内してからラッシュアワーを避けるために早めに新宿へ。夕食は100年を超えるという老舗の天ぷらやで。

翌14日は富士山を見たいという希望で箱根へ。生憎の曇り空ながら、桃源台から乗ったロープウェイから雲の上に富士山の頭が見えました。芦ノ湖では海賊船に乗り、箱根ホテルでランチ代わりの遅いお茶。帰りはバスで小田原へ。箱根フリーパスを十分に活用しました。

15日はまずは代々木駅から明治神宮へ。思いがけず結婚式や七五三の着物の参拝客が多く大喜びでした。大安、晴れの週末のお蔭です。境内を原宿まで歩き、原宿も探検。渋谷では有名な駅前の横断の人波を見てからデパートでまたお寿司。最後は皇居へ。

その後東京駅で別れて私は上越へ。彼らは翌日京都へ発ちました。

次回の来日の時には直江津まで来たいと言っていましたので、その希望が叶うことを願っています。



活動の記録

妙高市立小学校の平和学習に協力

今年も、妙高市立小学校が平和学習のために平和記念公園に来訪しました。

学校名(組)	月 日	(曜日)	児童数	日豪協会対応者
妙高小	10月13日	(木)	25	近藤
新井中央小(2組)	10月19日	(水)	26	矢頭
妙高高原南小	10月20日	(木)	15	関川
斐太北小	10月27日	(木)	16	関川
新井南小	10月28日	(金)	10	中村
妙高高原北小	11月1日	(火)	23	柴田



キャンベラ豪日協会の来訪

キャンベラ豪日協会の会員が平和記念公園の見学に来訪されました。8月6日にキャンベラで開催されたキャンベラ豪日協会主催の市長歓迎会に参加された方でしたので、市役所に連絡して担当課長にも来てもらいました。

日時：10月11日(金) 10時30分～15時

来訪者：Beth Cox と Peter Cox

対応者：近藤会長



柏崎市立瑞穂中学校 2 年生の平和学習

矢頭 治

10月19日(水)9時30分、柏崎市立瑞穂中学校2年生3クラス79人の生徒さんが付添の先生と共に平和絵記念公園に来訪しました。同中学校では毎年の平和学習の一環として1年生または2年生が来訪しているそうです。

この日は2班に分かれて、それぞれの班を中村忠雄さんと関勝さんが案内をしました。

展示館内ではビデオをみていただいた後、戦時の暮らし、捕虜収容所と平和記念公園設立の経緯、カウラ脱走事件などを説明し、公園では平和友好像、被爆アオギリ・被爆クス、タイムカプセルなどの説明をしました。

生徒さんは、予習もされていて熱心に話を聞き、多くの質問もありました。なかでも法務死者の遺書を、時間を忘れて読み入る生徒さんが多かったのは印象的でした。若い心に遺書の文章が響いたようでした。そこで、その遺書が掲載されている上越日豪協会編(1996)「太平洋にかける橋」を一冊贈呈しました。

見学の終わりに、生徒さんから御礼の言葉があり、案内者に花束を贈呈していただいたことは、予想していなかった喜びでした。



平和公園来訪者：70年前のご近所さん

矢頭 治

10月19日(水)の昼ころ、午後の見学準備のために展示館にいたところ、年配のご婦人が来訪されました。終戦後まで平和記念公園の並びにあった料理屋「みかど屋」の娘さん姉妹2人がその娘さん1人の付き添いで、直江津を離れてから約70年振りの郷里の訪問だったそうです。

お姉さんは1921年（大正10）生まれの樋口某さん。戦前に中国に渡り、中国で結婚し子供を授かり、終戦直後は中国共産党軍の病院に入院し、1953年（昭和28）になりやっと帰国できたとのこと。短時間にはお話を聞くことが出来ないようなご苦労があったようです。

妹さんは1924年（大正13）生まれの野田某さん。終戦後に結婚して東京市（当時）に移るまで、この公園の近辺の実家に住んでいました。毎朝、捕虜収容所から日本人を先頭にして20人くらいの捕虜が行進して工場に向かい、夕方には同様の行列で収容所に帰る姿を見たそうです。夜には、ラッパ（おそらくトランペット）の音で「蛍の光」などを練習しているのを聞いたそうです。

お二人には弟さんがいて、終戦の年に徴用されて、陸軍の通称「暁部隊」に所属して山口県に出征して終戦を迎えたそうです。

妹さんによれば、終戦直後には直江津で、米軍機がドラム缶を田んぼなどに落としているのを見たそうです。その中には食料などが入っていて、子供たちはガムやチョコレートを貰いに集まったそうです。「私は子供じゃなかったので行かなかったけど」と言っておられました。

戦争に翻弄された人生のお話を聞かせていただきました。今はご高齢にもかかわらず、お元気でお幸せそうでした。今回は妙高温泉に宿をとって故郷を訪問し、できれば旧知の人を訪ねたいとのことでした。



オーストラリアハウス 「越後妻有大地の芸術祭」2016年度に参加して

藤田 雅子

11月5日（土）に十日町市で行われた「ワンロード—現代アボリジニアートの世界」展に参加しました。ほくほく線がその時期1000円のフリー切符を発行していたので、それを利用しました。

11時に十日町市の会場「キナーレ」に近づくと、昨年浦田で聞いた太鼓チーム「うらだや」の勇ましい大太鼓の音が聞こえてきました。

丁度会場では、アボリジニアートのそれぞれのパネルについて、オーストラリア国立博物館のキュレーターのマイケル・ピッカリング氏が作品説明を始めた時でした。若い女性が通訳してくれましたが、英会話教室にお世話になっていたおかげで半分くらい彼の言っていることが分かり、直接に相手の言葉が分かる喜びを実感しました。

今回のテーマは、オーストラリア西岸の砂漠地帯で北の港まで牛を移動させるために切り開かれた道（ワンロード）です。現住のアボリジニたちに聞き、描いてもらったワンロードの絵が中心に展示されていました。その絵には井戸を示す丸いモチーフがふんだんに使われ

ています。それはアボリジニの人たちにとっては、ワンロードの途上にある井戸の場所を示す地図なのです。

展示された絵の中には、赤子の女の子が人食い人種に捕まりそうになっていて、悪魔の象徴である蛇や、トカゲ、木などの様々な象徴を配置した絵もありました。絵を描くことができるのは神の靈感を受けた特別な神官のような人だけです。今回来られたカーティス・テイラーさんの説明では、成年に達しない若者が禁断の岩の絵を盗み見たために不可思議な死に方をしたという伝説もあるそうです。一見素晴らしいモダンアートに見えるその絵たちが不思議なオーラのもとに書かれていることに、何か異次元の世界を見たように思います。

展示された絵のパネルの説明の後、現地のアボリジニのマーブィン・ストリートさんが実際に赤いテラコッタのような砂でサンドアートを見せてくれました。彼の作品は真上からカメラでモニターされ、見ている私たちが作品の制作過程を見ることができます。人が歩き始め、穴を掘り、しゃがみ込み、子供を抱きかかえるなど、次々と展開していくさまが面白く、あとでその一コマコマを繋いでいくとアニメができるのだそうです。

昼休みを挟み午後は市内の映画館で、まず北川フラム氏のお話を聞き、次に本題のマイケル・ピッカリングさん（オーストラリア国立博物館）によるアボリジニアートの解説がありました。ピッカリングさんはアボリジニアートの著名な研究者だそうで、講演の中では、近年有名になっている井戸の絵以外にも、歴史をさかのぼってオーストラリア北東の湾に面したエリアから始まったらしい古代の



アボリジニアートを見ることができました。その絵には井戸の丸はありません。その他に、移住してきた白人に虐殺されて聖なる世界に行ったアボリジニを表した絵、ドラゴンやカンガルーを神格化した絵などもありました。今なら本当に見事なモダンアートとも言えるような作品もありました。絵は、学習とかでなく、天から与えられるものなのだと思います。

アボリジニの世界を満喫した、素晴らしい芸術の秋の日になりました。

北川先生のお話の中では、「日本は東のアメリカ合衆国、西の中国ばかりを気にしているようだが、それに交わる、南北の、オーストラリアとの関係を見つめ直す時だ」と仰った言葉が印象に残っています。太平洋戦争というとアメリカとの戦争とすぐ思い浮かびますが、私達のおひざ元に日豪の両方の国に大きな悲劇を残した捕虜収容所跡があり、太平洋戦争は日本とオーストラリアとの戦争でもあったのだということを再認識しなければならない時だと、もう一度、心に言い聞かせました。



パースからの訪問者

柴田 美代子

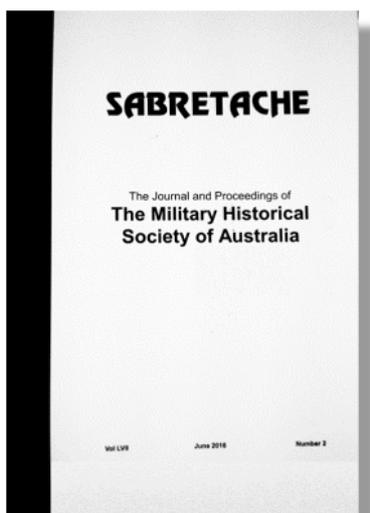
2016年11月21日、オーストラリア西部の都市パースから4人の訪問者があった。上越訪問前にすでに何箇所か日本各地を訪ねられているとのこと。近藤会長、関会計と私は直江津駅改札口で、エリス夫妻（ピーターさん、ジュディさん）、グランデ夫妻（ダグラスさん、ロンダさん）を出迎えた。お互いに挨拶を交わした後、これまでの旅の様子等をお聞きしながら車へと移動。平和公園へと向かった。

当日は風が強く少し寒かったが快晴。晩秋の上越地方の気候を考えると貴重な青空、公園を見ていただくには良い日であったと思う。4人の皆さん全員が、一箇所ごとに時間をかけて見学され、多くの質問をされていた。オーストラリア側銘板碑の前では全員で、この地で亡くなられた60名の捕虜のためのみならず、現在進行形で未だ絶えない戦争犠牲者のために鎮魂と平和への祈りを捧げた。

展示館では見学の後、展示室内にあるオーストラリアの自然、動植物の写真集のページをめくりながら、暫しのオーストラリア談義となった。

夕食は近藤会長と私が彼らに合流し、楽しい日豪交流の宴となった。当日入った店のメニュー表は写真付きで、しかも日本語版と英語版があり、私たちのような日本人と外国人とが一緒のグループには大助かりであった。

その後、翌日には秋田へ向け上越を発つという4人の旅の無事を祈りつつ、別れの挨拶を交わした。



【補足】

来訪者は「オーストラリア軍事史研究会」の会員でした。同研究会は左の研究誌を発行していて、直江津の捕虜収容所について、またその後の平和記念公園、そして上越日豪協会の活動についての投稿を歓迎する、とのことでした。

(矢頭)



英語学習会の活動

上越市高田公民館で毎月第二日曜日と第四日曜日の午後に2時間の英語学習会を開催しています。この学習会はオーストラリア側とのコミュニケーションを図るスキルを身に付けることを目的にして協会の発足時から始められたものです。一応、中級レベルを目指していますが、それにこだわらず各自の自発的な学習会にしています。英語で意見を発信しようという大人の英語学習会です。

今年は11人の会員がNHKのラジオ講座やその他独自教材で24回の学習会を行いました。2017年1月8日には学習会の前に昼食会を開き、参加者の懇親を深めました。5回は英国スコットランド出身で上越市在住の女性ニコラさんに講師をお願いし、また1回はオーストラリア在住の上越日豪協会の特別な友人カーメルさんを迎えての昼食会と学習会（懇談?）を楽しみました。

月 日	担当者（敬称略）
4月10日	白川
4月24日	カーメル
5月8日	ニコラ
5月22日	近藤
6月12日	大嶽
6月23日	内山
7月10日	ニコラ
7月24日	笹川
8月14日	柴田
8月28日	白川
9月11日	ニコラ
9月25日	矢頭

月 日	担当者（敬称略）
10月9日	大嶽
10月23日	近藤
11月13日	ニコラ
11月27日	笹川
12月11日	柴田
12月25日	矢頭
1月8日	白川
1月22日	ニコラ
2月11日	大嶽
2月26日	近藤
3月11日	矢頭
3月26日	笹川



投 稿

2015年3月オーストラリアへ

関 勝

2015年(平成27年)3月14日(土)、まさに北陸新幹線開通の日、オーストラリアへ行くことに決めた。成田発午後12時15分、メルボルン到着がその日の午後11時35分(次の日が日曜日)で迎えに来てもらうためであった。しかし新幹線の切符は買える筈もない、もし買っても出発飛行機便には間に合わない時間なので断念した。

午前3時、未だ暗闇のなか、長野市にあるタクシー会社のタクシーがやってきた。オーストラリアへ行くには成田空港へ重たく大きな荷物も一緒に持っていかなければならないので、空港行のタクシー会社を一か月ほど前から予約をしていた。運転して来たのは女性だった。女性のタクシー運転手はいまどき普通だが、深夜のこの時間に、しかも長野から上越まで来るとは驚きだった。車中、世間話でこのタクシー会社は主に電話予約のお客であるというような話をしてくれた。高速道路には雪もなく、快適に長野からの合流場所に到着し、ここから成田空港へいく8人乗りのジャンボタクシーに乗り換えた。他の客はヨーロッパ方面に行く夫婦やいろいろだったがお互いに話し合うこともなく黙って乗っていた。途中渋滞にあわないように運転手は交通情報を受けながらも、予想もしない都心の高速道を走り、何とか便に間に合うよう、ようやく10時には空港に到着した。飛行機はLCCのジェットスターで成田からメルボルン直行便で行くことに。

今回は一人旅のため、空港に着いてからが大変。チェックインカウンターで荷物を預け、出国手続き、搭乗ゲート等間違いないようきょろきょろとしてやっと搭乗することができた。飛行機は今話題の最新のボーイング787。座席の前にすべてモニター画面があり、フライト中の現在の飛行状況やら高度、スピード等の表示が出たり、有料での映画や、音楽を聴けたりする娯楽兼用機。飛行中1回だけエアポケットに入って、コーヒーが手にかかり熱い思いをした。

入国カードは英語で書かれていたが、何とか記入できたが、tuberculosisの意味が分からず、持っていった辞書で調べ結核になっているかの質問であることがわかり事なきを得た。到着後は荷物の受け取りだが、なかなか出てこなかった。時刻は真夜中の12時過ぎ。1時間過ぎても説明もなくただ待つのみ。周りには携帯で電話する者もいたが、こちらは携帯電話を持っていないので、迎えに来ているはずの豪州人の義理の息子に連絡もできず、少し心配

になった。ようやく荷物を受け取り、待っていた彼に会ったのでホッとした。その後、真夜中に家まで120キロ先のフリーウェーを西に向けてひたすら走り、娘たちの家についたのは午前3時近かった。

訪問した町はバララット。人口は8万人ほどで大きな市ではない。1850年代に金鉱が発見されゴールドラッシュで発展したところ。今も周囲に牧草がひろがっている。

市の中心部にメルボルンへの駅があり、娘たちの家から徒歩で20分くらいの距離があり、ちょっと遠い感じだった。標高450メートルの地で道路のほとんどは上がったたり下がったり急な坂道ばかり、自転車に乗ることはできなかった。

住宅街は、片側1車線の道路の外側に、道路と同じくらいの幅の緑地帯があり、さらにその外側に歩道があり、住宅ほとんどが平屋建てで、広々としていた。

出かけるには車が必要だが、やはり外国であり運転習慣も日本人とは違うし、一瞬に道路標識や地名を読めないといけないので、もしものことを考えて、1～2週間いるくらいでは車を運転することは断念した。住宅街では交差点のほとんどが円形交差点(ラウンドアバウト)で、通過するときには運転者から右側からの車が優先なので、慣れるには時間がかかると思った。



バララットは1956年(昭和31年)にメルボルンでオリンピックがあった時のボート・カヌー会場となったウェンドリー湖があった。そこは黒鳥やカモがいる周囲6キロのきれいな湖だった。ここでもやはり湖の周りを走っているたくさんの人達があった。この湖は2006年には旱魃のために一滴も水が亡くなってしまったことを、後日日本に来られたカーメルさんから聞き、信じられない思いがした。

次回はもう少し歩き回ろうと思う。



毎年秋に平和記念公園を訪れてくださっている本間浩氏のエッセイが第12回「文芸思潮」エッセイ賞の優秀賞を受賞しました。このエッセイは本間氏の直江津の捕虜収容所の関わりを記述したものです。本間氏の許可を得て、ここに転載します。なお、本間氏の平和記念公園訪問については会報54号に記載されています。(矢頭)

第12回「文芸思潮」エッセイ賞 優秀賞

一個の握り飯

本間 浩

敗戦の日から半年間のことはほとんど記憶にない。ポツカリと抜けている。どうしたことだろうか。敗北感から奈落の底にあって心の傷の痛手で伏せていたのか、茫然自失の果てに無の日々を過ぎてしまったからか、それとも、空洞を埋める術を知らなかったからか、いずれにしてもそれまでに目にしたはずの悲惨な事々を含め、意識してか、或いは無意識のうちにか、忘れようとしたのは疑う余地もない。

それに対して、敗戦の日までのおよそ半年間のことは、忘れようにも忘れられない鮮明な記憶がある。脳内細胞が記憶の喪失を拒み、かたくなに忘れることを阻み続けているのだ。

十五歳、多感の少年期の若々しくも愉しく辛く苦しかった日々が——時を経て、いま、余命が短くなった私を苛み、責める。許してくれと叫び、或いは哀訴するが、それがかなわない。生き、生かされている身に課せられた宿命として受けなければならない責め苦かもしれない。

あえて、ここで目を瞑しその時の事を告白する。命の尊さを再度心に教え込ませる。もってして、そこで生涯を閉じたい。

その時は、一瞬のためらいがあったが、私はあってはならない行動をとっていた。捕虜の一人に、一個の握り飯を手渡したのだ。小さく「プリーズ」といって。

一瞬、信じられないといった彼の表情にとまどいがあったが、のちに私の表情を読み、判ると眼がうるおい、低く応じた。「サンキュー」

昭和二十年七月のある日。

日本海岸沿いのJ市の夏空は蒼く、高く、焼きつける暑い日差しが工場（N特殊製鋼）に照り付けていた。

小柄の私の目の前に、身にボロ布のような夏の軍衣をまとった長身瘦躯、白い肌色から生気が失せた碧眼のイギリス兵の捕虜が立っていた。背後には一群の捕虜たちがいる。工場の建物の裏手の、人目の届かぬ一隅での出来事であった。

その時、私は、勤労学徒として軍事工場に動員された中学生であった。勤労働員の学徒や挺身隊員などの臨時従業員をまとめる人事庶務に関わる業務の補助員として働かされていたのだ。朝、就業人員を点検し、人数を報告して昼に特別配給される一人一個の握り飯を配るのも仕事のうちであった。

それが、時に、配りだすと、どこでどう間違えたか不足することがある。そうなると大変だ。その事態を避けようと、二個か三個を余分に申請することを覚えてしまった。余った分は同じ学校からの同僚に秘かに回す。その行動は許されるものではないが、混乱している時とところだ、なぜか、罪悪感がとぼしくなっていた。誰もがひもじいおもいをしている、ましてや学業ならぬ不慣れな労働の下でのことだ、少しは、それを癒してもよいと思っても不思議ではなかったし、喜ばれもした。更に、正直にいうと、そのことは善意だけの行為ではなく、体力のない私とその役得で優位にたって、抗らえ難い力の同僚に対しての、保身の手段にしていたことも事実であった。

ある時、その行為が枠からはみ出てしまった。

痩せ細った哀れな姿——囚われの身で自由が得られず、願いもかなわず、努力も封ぜられた身上の捕虜の姿に、目線が合ったのだ。子供心にも、ふと、仏心らしきものが湧いたとでもいうのだろうか。彼らの日常の食べもの事情のおおよそを知っているだけに、ひもじい思いをしている筈だと——。

私たちが、屋外で特配の握り飯を食べているのを横目で見ていた姿に、思わず近寄って一個の握り飯を手渡していたのだ。

「プリーズ」返して「サンキュー」が交わされた。

正直、その時には敵意が失せ、同情の念に置き換えられていたようだ。彼らも人間。人と人との対等の立場を意識した。心を、情けを与える。その時、戦地で戦っている同輩と戦士たちの姿が念頭から失せていたのだ。見つければ大変なことになるという恐れさえ忘れて——。

後になって思い起こすと、私の脳裏に、矢継ぎ早に思いが交錯する。「戦友たちを裏切った」「申し訳ない」「悪いことをした」「利敵行為」「人命を重んじた」「許される」「許されない」「反逆」「善意」「戦死した英霊への言い訳がたつか」「敵に塩は上杉謙信の教え」「飢えに人種はない」「命を救う」「仏心」など等——。

以来、善悪の判断が錯綜する歳月が続いている。反復、自分を叱責し、語りかけ、頷き、ののしり、なぐさめ、言い訳をして、なぶり続ける。しかし、答は今日にいたるも得られずにいる。記憶があることを呪いさえもする。忘れられれば悩まずにすむものをと。

ただただ、ひたすらに、惨い嵐の過ぎ去るのを耐え忍んでいる。

彼は、私から一個の握り飯を受け取ると、両手に包むようにして持ち……同僚たちと深くうなづきあい……腰につるしていた炊事用の鍋——といってもそれは国際赤十字社からの救

じゅ品の缶詰の空き缶で作った代用鍋に……握り飯を崩して入れ……水をいっぱい張り……工場の空き地に生えていた雑草を小さくちぎり……混ぜ……枯草と木の端を集め……器用な手つきでレンズで太陽の光を集めて火を作り……スープのもどきの雑炊を炊き上げ……スプーンですくって口に運び……二口か三口をすすむのだった。

その後に隣の同僚に回し、回して……口元についた一粒の米粒を、いたわるように摘んで口に入れる。私はその光景を凝視し続けていた。

握り飯のお礼だといって、救じゅ品のイギリス製の煙草を、一本私に差し出した。初めてのイギリス煙草はウエストミンスターと読めた。私はその煙草をすう。そしてむせた。「オー、ノー・グッド」偽善を戒めるかのような言葉になった。

以来、同様な展開が数度繰り返されたが、そのつど自己批判をしているうちに、戦争は終わった。その日を最後に、彼らの姿に再び接することはない。

許してもらえないかとの思いで、尊い命をささげられた彼等の戦士たちに、深く哀悼の意を伝え、惜念の意をもって告白に及んだ次第だ。

ここで付け加えての後述がある。

J市の元捕虜収容所跡地につくられた平和記念公園に、収容中に死亡した捕虜を弔う慰霊碑が建てられている。

ここ数年、新米のとれるのを待ち、悔悟の念が高じてきて、供養から、碑に握り飯を供えに行っている。

その碑の傍らには捕虜虐待の罪を問われて刑死したB C級戦犯者を弔う碑がある。無念の死であった彼らはいずれも農民であったと聞く。生きていれば自分の田で刈り取った米を、存分に食べていただろうにと——その碑にも握り飯を供える。憐憫の情がわいてくる。

二つの碑に、合掌し、頭をたれる。



訃 報

覚真寺藤戸秀庸住職を偲んで



石塚 洋子

徳音山覚真寺第十六世藤戸秀庸住職が2016年11月5日に65歳の若さで亡くなられた。住職には「上越日豪協会」設立以前の「直江津捕虜収容所跡地に平和友好記念像を建てる会」発足よりも、更に前から協力して頂いている。取るもの取り敢えず11日のお葬式は9時30分からだったが、私は8時30分前

には会場の寺本堂に入っていた。檀家の多い覚真寺なので参列者が多いのは分かっていた。

幸い後部に1列だけ椅子が並べてあり、最後の1脚に腰を下ろすことが出来た。続々と参列者が出入りする中で私は昔々の事に思いを馳せることが出来た。私は旧制女学校卒で上越病院に事務員として就職した。当時病院では「有田診療所」としてこの本堂に近いお庫裏の一部を借りて、週に何回か診療をしていた。1950年頃にはまだまだ今の車社会には遠く、各地に診療所が開かれていた。私も何回か診療所へ出張していたので、第十四世円理住職にお会いすることもあった。しかし戦時中に亡くなった捕虜の遺骨を預かってくれた、豊かな人間性をお持ちの方だとはちっとも気が付かなかった。1954年に亡くなられたという。

私は第十五世慈雲住職ともお話しする機会があった。残念な事に1955年に早世された。第十六世になる筈の秀庸さんが4歳だったと聞く。慈雲住職の奥様がその後長い間坊守として第十六世秀庸住職が成長される迄、いやその後も檀家のお相手は元より、私たちがオーストラリアからの来訪者（元捕虜のみならず、駐日大使や各州の退役軍人連盟のメンバー、カウラ市長と関係者など）を案内する度に、いつも快く歓待して下さった。

ようやく喪主の真史副住職の挨拶が始まった。見渡すと、縁類らしい僧侶の方々の1群や、近隣からの僧侶らしい方々が仏間の中までいっぱいだった。副住職は間もなく第十七世になられる筈、若奥様が赤ちゃんを抱いておられる。2歳位の双子の子供さんたちが時々奇声を発せられてしめやかな空気を和ませてくれる。荘厳な読経に圧倒されながら、第十八世まで候補者がおられて安泰な覚真寺の将来を嬉しく思った。御棺にお花を入れる時の面影は、当会の平和記念公園開園20周年記念祝賀会での第十六世住職そのままだった。合掌



本号の写真は本会理事が撮影したものを使用しました。

本号で使用した図は以下のHPサイトのフリー素材を使用しました。

<http://www.wanpug.com/illust179.html>

(本号のpdfファイルをご希望の方は理事までご連絡ください)

2017年3月31日発行　じょうえつ日豪協会会報　第65号